

『稲垣益穂日誌』の記録と挿絵にスケッチされた

明治後半期の石狩川河口地域のサケ漁

"Inagaki Masuho Diary" and illustrations of salmon fishing
around the Ishikari River estuary area in the latter half of the Meiji period

荒山 千恵*

Chie ARAYAMA*

キーワード：稲垣益穂日誌，地域誌，近代（明治），小樽，石狩

1 はじめに

『稲垣益穂日誌』（小樽市指定有形文化財／小樽市総合博物館所蔵）は、小樽区稲穂尋常高等小学校（現在の稲穂小学校）校長などを務めた稲垣益穂（いながき ますほ／1858～1935）が記した日記資料のことである（以下、『稲垣日誌』と記す）。稲垣が小樽に移住する以前の1896（明治29）年から亡くなる直前の1935（昭和10）年までの約40年間にわたり記され、全55巻にのぼる（山本・石川，2022；小樽市教育委員会，2022）。本稿では、『稲垣日誌』のうち、稲垣が石狩川河口地域を訪れた際の記録から、サケ漁に関する記述と挿絵（スケッチ）について取り上げる^{（注1）}。

2 石狩川河口地域のサケ漁に関する記録

『稲垣日誌』では、稲垣が石狩川河口地域を訪れた二つの記録がある。一つは、明治36（1903）年の日誌、もう一つは明治44（1911）年の日誌である。これらの記録のうち、ここではサケ漁の記述についてみていくこととする。

（1）『稲垣日誌』八巻＜明治36年3月1日～11月30日＞

日誌によると、1903（明治36）年10月17日に、稲垣が小樽から石狩を訪れたことが記されている。汽車を軽川で下車し、軽川から樽川・花畔（昼食）・志美小学校の門間を過ぎ、午後3時過ぎに石狩に着き、そこで稲垣が見たサケ漁の様子を文章と挿絵（図1，2）により描写している。以下に、サケ漁にかかる記述部分について引用する。

「（前略）海岸に出て見ると大網を曳いて居た。其曳く体裁が頗る面白い。最初は「ロクロ」にて巻き、網の端が浜に達すると「ロクロ」をやめて腰につなをつけて曳く手を振り、腰をひねって調子を揃える有様、宛然体操を見る如くである。網は其端両方で曳いて居るか、一方に三四十人はかゝつて居るから合して七八十人はかゝつて居るであらう。そこへ葛西氏が来て、此の網を引きあげるまではまだ二時間も間があるから、其待つ間に河の網を見たがよからうといふから、とり敢ず其方へ出かけた。河の網は小形であるから朝から晩までに十二回曳くのが例であるそうなる。見て居る内にやがて一網曳きあげた。二十尾位もかゝつて来たか潑刺としてどうも面白い見物であった。河の

* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

網は引き方が少し違ふて居るが、手を振って調子を合するのは同様である。それから海の方へ出て見ると、丁度網の上る処であった。急いでゆきて見る内に網はあがった。

小形のものを除いて丁度百八十尾漁獲した。数を計算するとやがて女の背によって他に運ばれた。今朝の網では千余尾を漁獲したそうなる。鮭の漁も元は非常に多かったそうなるが、濫獲の結果だんだ

ん減じたので今では一日(一日十一日廿一日)と夜間とは休むことに規定されている。網元は僅に数軒の資本家。労働者は傭はれている。九月の末から漁が始まって網の片付けは十二月になるそうなるが、其間の給料が船頭で五十円其他は漸次下つて居る。外に賞与があるといふことである。」(小樽市博物館編, 1987: 62-63)



海にて鮭を
捕る大網を
曳く
網の長さ凡
一千間ひき
はじめて
ひきあぐる
まで凡そ
三時間を要せり
一日にひくこと二回

図1. 『稲垣益穂日誌』1903(明治36)年の挿絵
(小樽市博物館編1987:65)
画像:小樽市総合博物館



石狩河
にて
鮭の
中網を
ひく
一日の仕事
十二回

図2. 『稲垣益穂日誌』1903(明治36)の挿絵
(小樽市博物館編1987:65)
画像:小樽市総合博物館

日誌には、稲垣が現地で目にした石狩川河口地域での海と河川の両方で行われていた地曳網の様子が記されている。それぞれ規模・人数・1回の網にかかる漁獲量・1日に曳く回数が具体的に示され対比的な内容となっている。川辺での網が海辺の地曳網の曳き方と少し違っているが、いずれ

も手を振って調子を合わせることが述べられ、その様子を挿絵に描き、「体操を見るが如く」を窺い知ることができる。網を曳きあげてから漁獲数を計算し、その後は女性が背負って運んでいたこと、漁獲量の減少に伴う漁の規制として1の付く日と夜間は休む規定があること、漁をおこなう期

間、船頭の給料のことや賞与があることなども記されている。サケの運び手は女性で、「背によって」と記されていることから、畚（縄製のモッコ）でサケを運んでいたと考えられる。挿絵には海側（海浜）と川側（河岸）の地曳網の様子がそれぞれ対比的に描かれ、絵図とともに簡潔な説明も付されている。海で曳く大網については、「一千間」とあることから、長さ約 1.8km（1 間は約 1.818 メートル）におよぶことがわかる。

（2）『稲垣日誌』十八巻〈明治 44 年 1 月 1 日～10 月 31 日〉

1911(明治 44) 年 10 月 12 日(木) および 13 日(金) に、高等 2 年生を引率して石狩を 1 泊して訪れた宿泊研修の記録がある。軽川から直線の道路 4 里半を歩いて石狩に着き、その日の午後の記録にみられる石狩川河口でのサケ漁に関する記述と挿絵を抜粋する。

10 月 12 日(抜粋)

「午后ハ河岸ニ至リ曳網、燈台等ヲ見物シタルガ、河ノ洪大ナル、曳網ニ澆漉タル大鮭ノ入り来ルナド児童等喜ビ一方ナラズ、何レモ小躍リシテ之ヲ見物セリ。」(小樽市博物館編, 1992:165.)

10 月 13 日(抜粋)

「(前略) 午前六時過食事ヲ済マセ十時迄ヲ期シテ随意遊覧ヲ許シ、余モ河岸ニ至リシガ、漁夫等ハ早クモ河ニ入りテ漁業ニ励ミ居タルヲ見タリ。余ハ朝寒ノ為外套ヲ着シ頭巾ヲ冠リタルモ、漁夫等ハ脚部ヲ河水ニ浸シ盛ニ働キ居タル感じ、左ノ如ク口吟セリ。

教へ子等 学べよ今朝の寒さをも いとはで鮭
をあさる浦人

今朝ハ昨日ヨリハ一層好漁ニテ、一網ニ四十尾以上入りタルモノモアリキ。」(小樽市博物館編, 1992:166)

「石狩ノ鮭漁ハ本年ハ非常ナル好漁ニテ、既ニ昨年ノ三倍余ヲ漁獲シタリトノコトナリ。

途中歩キナガラ、先刻ノ腰折ハドウモクド過ギテ面白カラズト考へ、左ノ如ク改メタリ。

教へ子等 学べよ今朝の寒さにも 石狩の川に
鮭漁る人

又、先般殿下行啓ノ際諸所ニテ小学児童ノ成績品ヤ運動会ナドヲ嚙ハシコトヲ思ヒ起シ

宮人は如何に見つらむ石狩の 野辺に榮
ゆる撫子の花ト口吟セリ」(小樽市博物館編, 1992:167)

この記述の挿絵には、石狩川河口にみる地曳網の風景が描かれ、左側手前ではロクロを回す様子がみられる。また、対岸に山並みが描かれ、石狩川左岸側から北東側（右岸広域）を見渡した風景と推測される。このような構図に類似性を窺わせる漁業図として、1883(明治 16) 年に東京上野で開催された第一回水産博覧会に札幌県が出品した漁業図とされる「石狩川河口の鮭漁の図」(黒野雄繁南)(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園所蔵)がある(図 4)。この絵画の構図は手前左側にロクロで網を曳きあげ、川(河口)には漁船、その奥に山並みが描かれている^(注 2)。稲垣のスケッチ(図 3)も、漁業図(図 4)の基本構図に共通している。稲垣が「石狩川河口の鮭漁の図」の知見をもってスケッチを描いたものであったかは明らかではないが、サケ漁を展望した位置がほぼ同位置(石狩川河口左岸側)から描かれたものとみられ、明治 10 年代から 40 年代前半期まで変わらない石狩川河口地域の典型的な秋のサケ漁の風景であったといえる。

さらに、日誌の記述の中に、殿下行啓のことを記して短歌が詠まれていることに注目する。殿下行啓については、1911(明治 44) 年『宮殿下行啓記念(上)』(北海道大学附属図書館所蔵)にある「鮭地曳網漁業」との関連性が結びつく(図 5)。行啓にあたり写真に残された漁業風景は、同年に稲垣らが宿泊研修で見物して描いた石狩川河口での地曳網の風景と同年秋季であろう。



図3. 『稲垣稲穂日誌』1911(明治44)年の挿絵
(小樽市博物館編 1992:166)
画像:小樽市総合博物館

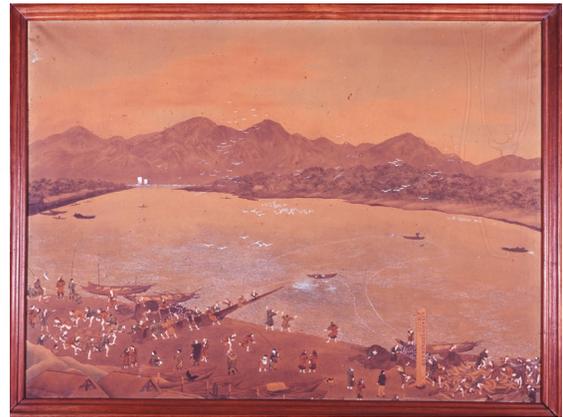


図4. 「石狩川河口の鮭漁の図」
黒野雄繁南(札幌県)1883
(北海道大学北方生物圏フィールド
科学センター植物園所蔵)



図5. 「鮭地曳網漁業」
北海道庁編 1911『東宮殿下行啓記念(上)』
(北海道大学附属図書館所蔵)

鮭地曳網漁業

此図ハ石狩川口左方ノ浜ニ於ケル鮭漁ノ景ニシテ網長千二百尋其両端ニ三四百尋ノ曳網ヲ附シ網ヲ沖ニ引廻シ網ヲ執テ陸ニ引ク此網一枚ニ付漁夫約七八十人ヲ要シ盛時ニハ一回数千尾ヲ獲ルコトアリ漁期ノ収穫平均五六百石(百石ハ六千尾)ナリ

(北海道大学北方資料データベース「鮭地曳網漁業」
内容説明より引用)

3 おわりに

本稿では、小樽市総合博物館が所蔵する『稲垣益穂日誌』について、その中に記された明治後半期の石狩川河口地域のサケ漁について取り上げた。特に、1903(明治36)年の石狩川河口近くの海側(海浜)と川側(河岸)の双方での地曳網の様子が具体的かつ対比的に記録されていた点は重要である。明治期の石狩川河口地域でのサケ漁は、誰もがイメージする「石狩といえばサケ」、「サケのまち石狩」の原点であり、稲垣が小樽から来

訪・見物して書き記したサケ漁の描写は、石狩の歴史文化的なランドスケープを示す貴重な記録である。また、明治期の石狩川河口地域でのサケ漁の様子を記録した資料として、明治後半期の当該記録と明治前半期の絵図「石狩川河口の鮭漁の図」との照合から、明治期の変わらない石狩川河口地域の風景が確認された。さらに、『東宮殿下行啓記念(上)』の写真資料と稲垣が二度目に石狩を訪れた年代から、同年代の2つの記録を照合して捉えることもできた。これらの資料は、いずれも石狩市ではなく他の機関がそれぞれ所蔵しているもので、石狩市内に残される地域資料と同時に、

当時の石狩を来訪した人々が残した記録が市外
他機関の所蔵資料に残されている場合もある。そ
れらの点在する資料を結びつけることで、地域資
料の考察がより深まると考えられる。今後も、市
内外の関連資料との位置付けにも注視しながら、
石狩の歴史文化について探究していきたい。

謝辞：『稲垣益穂日誌』の石狩に関する記述については、
2024年11月10日に小樽市総合博物館運河館で開催
された、「鮭箱とARAMAKI展」(ARAMAKI, うんがぶ
らす, 小樽市総合博物館共催)のトークイベント「石
狩川河口地域のサケの歴史と文化—サケの源流を探る
—」での講演の折にご教示いただきました。本稿執筆
にあたり、小樽市総合博物館の石川直章館長、いしか
り砂丘の風資料館の工藤義衛氏、石狩市学芸協力員の
石橋孝夫氏に大変お世話になりました。また、画像利
用にあたり、北海道大学北方圏フィールド科学センター
植物館の加藤克氏に大変お世話になりました。末筆な
がら心より感謝申し上げます。

(注1) 本稿の内容は、2025年1月25日に開催した、
いしかり砂丘の風資料館主催「連続講座石狩大学博物
学部」の「石狩歴史文化学」による発表内容の一部を
含む。

(注2) 黒野雄繁南「石狩川河口の鮭漁の図」につい
て、加藤 克 (2021)、工藤義衛 (2009; 2010) を
参照した。

引用文献

- 北海道庁編, 1911. 鮭地曳網漁業. 東宮殿下行啓記念
(上). 北海道大学附属図書館所蔵 (北海道大学北
方資料データベース).
- 加藤 克, 2021. 札幌農学校所属博物館 (Hokkaido
University Natural History Museum) 所蔵水産
博覧会資料について. 札幌博物場研究会誌, 93-
115.
- 工藤義衛, 2009. 石狩から見える山 (絵画編). いしか
り博物誌 98. 広報いしかり. No.674:11. 石狩市.
- 工藤義衛, 2010. 石狩川漁図の絵について. いしかり
暦. 石狩市郷土研究会, 23:33-42.
- 小樽市博物館編, 1987. 稲垣益穂日誌, 8. 明治 36 年
3月1日～11月30日. 小樽市博物館シリーズ
No.13. 小樽市博物館.
- 小樽市博物館編, 1992. 稲垣益穂日誌, 18. 明治 44 年
1月1日～10月31日. 小樽市博物館シリーズ
No.13. 小樽市博物館.
- 小樽市教育委員会教育部生涯学習課, 2022. 稲
垣 益 穂 日 誌 .[https://www.city.otaru.lg.jp/
docs/2021110400021/](https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2021110400021/)(閲覧: 2024年12月).
- 山本侑奈・石川直章, 2022. 『稲垣益穂日誌』小樽の
近代史を示す同時代史料. 小樽市総合博物館紀
要, 35:19-28.

